飢餓対策 NEWS　第 274 号　発行日 2013 年 4 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、20 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

「母の日」の贈答品に 100% シルクのストールを

5 月の「母の日」にすてきなシルクのストール（草木染、エチオピア製）のプレゼントはいかがですか。貰っても贈っても嬉しい国際協力になるフェアトレードギフトを是非ご利用ください。

■サイズ: 巾約 28cm×長約 170cm
■価格：1 本 3,000 円。送料無料（お届けは日本国内のみ）。プレゼント袋にてお届け（先様へ直接発送をご希望の方は、請求書の送付先をお知らせください）
■先着 20名様に㈱中京医薬品デイズケアセット（爪切り、毛穴ケア等）を進呈。
●お求め、お問い合わせ
㈱キングダムビジネス
FAX兼用電話 072-940-6814／ 6824
＊ https://www.kbwin-win.org/
母の日プレゼントからもお申込できます。
※なお連休の為5月12日㈰までに到着しない事もあります。お求めはお早めに。

海外キャンプ参加者募集 !!

開発途上国の貧困問題を学ぶと共に、現地でボランティアワークをします。

●マレーシア　ワークキャンプ
日程: 7月 31日㈬～8月 10日㈯
費用: 17万 8千円　募集: 12名

●ボリビア　ワークキャンプ
日程: 8月 16日㈮～ 28日㈬
費用: 33万 8千円　募集: 10名

●ルワンダ　スタディ・ワークキャンプ
日程: 8月 19日㈪～ 31日㈯
費用: 33万 8千円　募集: 10名

締切は6月中旬、定員になり次第終了。申込みは東京事務所又は各事務所まで。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
□ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ JIFH（日本国際飢餓対策機構）サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 500 円）
□ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女

〒
フリガナ
住所：

（電話）

▼申込日：　　年　月　日▼

FAX・072-920-2155

ハンガーゼロ・サポーター　2701口。ぜひあなたのお知り合いにもお知らせください。

支援活動を応援
韓国から来日のアーティスト

3月後半から 4月上旬にかけて、韓国から人気ゴスペルデュオ「宝を入れた土の器」（金成珍・高エデン夫妻・写真㊧）が来日して、関東地区のキリスト教会や老人福祉施設の計 12会場で東日本大震災支援コンサートを開催し、計 371,046円の募金が寄せられました。各会場では被災者支援活動を報告、被災地の現状や課題を知っていただきました。

また、3月 24日に東京でファン・ミーティングを開催された韓国人気女優のパク・シネさんが、昨年に引き続き会場出口でのハンガーゼロ募金活動に協力くださり、来会者から 62,392円の募金をいただきました。世界と日本の人々のために応援をしてくださった韓国人アーティストの方々と募金して下さいました皆様に心より感謝を申し上げます。

■発行者　岩橋竜介
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
いいね大募集
Webサイトアドレス　http://www.jifh.org/
eメールアドレス　general@jifh.org
フェイスブック　https://www.facebook.com/hungerzero
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
身近に便利になりました
●郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ

大阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル 517 号室
TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
愛知　〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111　FAX (052)731-8114
広島　〒730-0036 広島市中区袋町4-8 CLC ブックス 2F
TEL (082)546-9036　FAX (082)546-9037
沖縄　〒901-0156 那覇市田原3-8-1 ユリ香ハウス 201号
TEL (098)859-4585　FAX (098)859-4540
東北　〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6エマオ2階E
TEL (022)217-4611　FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。

日本国際飢餓対策機構　2013 No.274　5

飢餓対策 News

ルブンバシにたどり着いたコンゴ国内避難民（2頁にも記事）

解決の担い手となる

「昨日まで自分の無力さを感じて、毒を飲んで死んでしまおうと考えていました。しかし、今は違います。私には希望が見つかりました」

コンゴ民主共和国はアフリカ大陸のほぼ中央に位置します。コバルト、金、ダイヤモンド、銅などが豊富にある資源大国です。しかし、資源を奪い合う内戦が続き、平均余命は48歳、5歳未満の乳幼児死亡率は出生1,000人中199人、人間開発指数（平均余命や教育指数などを元にしたもの）は187国中、187位と最も貧しい国の一つです。資源があるがゆえに貧しくなるという、ある意味でアフリカの典型的な国です。

先日、JIFHのコンゴ人スタッフのジェローム・カセバ、親善大使のソンソルナムさんと共にコンゴを訪れました。首都のキンシャサから国内線で移動したのは、南東にあるルブンバシというコンゴ第2の町。そこで北に450km離れたブウェトという地域から追われた避難民の人々と出会いました。

昨年の12月末、対立していた部族が彼らの村を朝の5時に急襲し、40名に及ぶ男性が殺されました。生き残った人々は必死に逃れ、3週間歩き続けてこのルブンバシまでたどり着いたと言います。何が起こったのか今も分からずにいる子どもたち、おびえる女性、わずかに生き残った男性たちが国内避難民として、町の片隅に136名住んでいました。

私は、案内してくださった地元の教会の牧師や長老たちに「彼らの必要を聞いて、ぜひ地元の人が彼らに応えてあげてください」とお願いしました。パメラさんという避難民のリーダーが、ここにいるみんなに必要なものを聞いて、次の日教会に知らせると約束しました。

翌日の日曜日、避難民の方々7名が教会に来られました。牧師は教会員に彼らを紹介し、地元にこのような困っている人がいるのに、何もせず手をこまねいていていいのだろうか、今こそ手を差し伸べるべきであることを説きました。すると多くの教会員が彼らのためにと捧げ始めたのです。その時パメラさんが前に立ち、礼を言い、自分の兄も目の前で首を切られて殺されたこと、またどうやって逃げてきたかを話し、そして冒頭の言葉を述べたのです。リーダーとして何もできない無力感にさいなまれ、自死も覚悟したパメラさんは、同じコンゴに住む人たちが、自分たちのために祈り、支援してくださることに励まされたのです。

私たちが目指すハンガーゼロの活動は、決して大きな金額を投資するのではなく、そこにいる人々を励まし、自らが問題解決の担い手であることに気づいていく働きであることを再確認させられました。

「あなたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れよ」（聖書）

日本国際飢餓対策機構　常務理事　清家弘久

1 分間に 17 人（うち 12 人が子ども）・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

ハンガーゼロ　コンゴ民主共和国への支援

問題克服への新しいアプローチ

今年3月末に親善大使のソン・ソルナム氏、清家と共にコンゴを訪れたジェロームスタッフの報告です。

厳しい状況が続く国内避難民の皆さん

私たちはコンゴの教会だけではなく、老人ホームや地方の学校・孤児院、ストリートチルドレンのための施設などを訪問することができました。そして様々なグループのリーダー、特に困難の中にある人々に手を差し伸べている方々と話し合う貴重な機会を与えられました。

又コンゴの首都キンシャサでは、政府高官とも意見交換をし、この国が直面している様々な問題の解決には、新しい形のアプローチが必要であることを話し合いました。私たちはJIFHが、人々の身体の必要だけではなく心の必要にも焦点を当てて取り組んでいることを説明しました。

パメラさん㊨から当時の様子を聴くジェローム

私は、この国にはコミュニティーの問題に前向きに取り組み、周りに影響を与えていく力とビジョンと、強いリーダーシップが必要であると感じました。コンゴには様々な社会的な問題があります。子どもの教育問題、捨てられた子どもたち（ストリートチルドレン）、内戦や部族同士の争いによって精神的に傷ついた人々の支援などの問題です。

過酷な国内避難民の立場

私たちは、鉱山の町であるルブンバシで国内避難民となっている136人の人たちが、小さい建物の中で非常に悲惨な状況で暮らしているのを目にしました。そのうち90人が２歳にもならない子どもと共に、なにも敷かない床で眠っているのを見てショックを受けました。彼らは、「バルバ族によるバベンバ族とバゼラ族に対する迫害から逃れて、昨年12月からルブンバシの郊外で暮らしているけれど、地域の自治体からは何の援助もない」と語っていました。

パメラというリーダーにこの紛争について尋ねたところ、敵対する部族によって、彼の二人の兄弟も殺されたということでした。この悲しい話を聞いた後、この避難民のうち、薬を買うことが出来なくてすでに二人の人が亡くなっていることも知りました。ここにいる人々には食べ物や薬、そして家族とともに住む場所が必要です。全員が元いた村に帰ることを望んでいますが、危険なために帰ることができません。安全が確保される前に帰れば殺されてしまうかもしれないからです。

救済に立ち上がった地元教会

これらの人々の問題に対する私たちの最初のアプローチは、まず彼らが現在住んでいるルブンバシにある教会と彼らとの関係を構築することでした。私たちはこれらの人々と「グレース　エバンジェリカルチャーチ　ゴッド　イズ　アライブ」という地域の教会との橋渡しをすることが出来ました。そして聖書にある、困難の中にある人々を助けるという教えを実践するよう教会を励ましました。教会はこれに応えて、この避難民の人々を定期的に訪問し、また日曜日に教会に来て励ましを受けられるよう、限られた資金の中でこのうちの30人の送り迎えの費用を負担しています。

コンゴの紛争状態が終結し人々が平和に過ごせるようどうかお祈りください。また、地域の教会が国内避難民に食べ物、清潔な水、そして眠る場所を提供できるよう支援してください。私たちが出会った136人のうちおよそ40%が子どもです。したがって伝染病の発生を防ぐために衛生処置が緊急に必要です。特に子どものマラリアやコレラの感染を防がなければなりません。

JIFHは７月から本格的に支援活動を始めます。又リーダーを対象にVOCセミナー（共同体のビジョン研修）を行い、現地の人々が主体的に問題解決に歩み出せるように応援していきます。

6月にジェロームをコンゴ駐在西アフリカ担当として派遣します。ハンガーゼロ・サポーターになってご支援ください！

ケニヤ・シープケア学校から緊急の給食支援のお願い

2011年4月以来、日本国際飢餓対策機構（JIFH）を通じてシープケア学校の子どもたちの給食支援をしてくださっている皆様に心から感謝申し上げます。

JIFHによる給食支援が開始されたのは、シープケア学校が穀物の価格高騰によってこれ以上給食を提供できなくなり、在籍している児童の多くが路上生活に戻り始めていた時でした。

当時児童数は450名から300名まで減少していました。しかし給食が開始されてから児童数が急増し、現在500名が当校で学んでいます。このために教室の不足という新たな課題が生じましたが、一方で子どもたちの成績は伸び、多くの子どもたちが中学校へ進学できました。今年は最終学年32名のうち20名が、中学校へ進学する資格を得ることができたことは子どもたちだけではなく、私たちにとって大きな喜びです。自治体の規定より低い給与でも頑張ってくれている教師たちは、このことにとても励まされ、ますます意欲的に教えています。

穀物価格急騰で負担増大

しかしながら児童数の急増とさらなる穀物の高騰によって、2013年3月末には給食の提供が再び困難になってきました。このような状況から、緊急に皆様に支援をお願いしたいのです。

神様は私たちに皆様と出会わせてくださり、生き残る術や発展の方法を知らない地域の人々に希望を与えて下さいました。シープケア学校の給食が継続できなければ、ここでしか食べ物が得られない子どもたちの命が危うくなります。

将来を失っていた多くの子どもたちに希望を与えるこの給食プロジェクトが継続できなくなることは、神様と人々に申し訳が立たないことになります。どうぞご協力をお願い致します。

（報告・シープケア学校ルーク校長）

シープケア学校には、昨年10月から長期ボランティアとして大久保愛美さんが学校運営のお手伝いを続けています。近々、ボランティア日記の第２号を誌面に掲載いたします。お楽しみに。

給食を行うにはハンガーゼロ・サポーターのみなさまのご協力が必要です！ぜひサポーターになってこの子どもたちを支援してください！

又現在この学校に通っている500名のうち、約100名の子どもたちが里子として支援を受けています。しかし、まだ支援を必要としている多くの子どもたちがいます。この子どもたちのチャイルドサポーターとなって応援してくださる方を募集しています。皆様のご協力をお願い致します。

シープケアの
子どもたちを支える
**ハンガーゼロ
&チャイルド
サポーター大募集**

フィリピン第2の都市、ミンダナオのダバオ市内から車で3時間余行くと、フィリピン最高峰アポ山の中腹（標高1,200m）にあるティボロ村に到着します。今回はこの村で里親会の里子支援を受けている子どもたちの生活をご紹介します。

世界里親会　フィリピン・アポセンターの子どもたち

明るい未来が来ることを信じて

ジェファーソン
バントニアル
14歳

ジェファーソンとジャスミンが通っていた村のティボロ小学校

将来は教師になりたい

家族はバゴボ・ダガバワという少数民族に属しており、両親と4人の兄弟姉妹がいます。もともとダバオ市内で家族一緒に暮らしていましたが、母親が病気で働くことができず、建設作業員の父親の稼ぎだけでは子どもたちを養うことが困難になったために、3年前から４歳の妹と共にティボロ村の祖父母の家で暮らしています。

彼の祖父は高齢のうえ体の痛みがあって働けないので、祖母が他人の畑でとうもろこしやアバカ（マニラ麻）、コーヒーの収穫を手伝い、その日当で生活しています。

ジェファーソンは勉強熱心で学校の成績も良く、特に算数と理科が得意です。今年３月には小学校を卒業し、６月からは高校（日本の中・高に相当し４学年制）に進学する予定です。将来は学校の先生になる夢を持っていますが、その前に挑戦しなければならないことがあります。それは高校を卒業することです。彼は質素な暮らしの中でも満ち足りた心を持ち、神様が与えてくださるものを用いて前進していく子どもです。

家庭の事情で祖父母の家で妹と暮らしています

毎朝５時に起きて家事をしています

ジャスミン
オンダヨ
14歳

デザインの才能で家計応援

彼女もティボロに住み、現在高校１年生です。ティボロ小学校を卒業したときは、卒業生総代に選ばれました。家族は両親と兄弟と従妹の５人です。父親は農夫、母親は叔父さんの店で働いています。

朝は４時に起きてお弁当を作り、友達と一緒に学校へ行きます。学校は徒歩で片道１時間半かかります。雨季には道がぬかるんで通学がたいへんですが、彼女は、遠くても勉強を続けることがより良い明るい未来を手に入れることにつながると信じて頑張っています。

学校から帰宅する時間にはまだ母親が店で働いているので、彼女が代わりに晩御飯をつくり、食後は食器を洗い宿題をして９時に就寝します。

学校が休みの時や時間がある時には、伝統的なブレスレットなどのアクセサリーを作っています。彼女は手先が器用で、物を作ったりドレスのデザインをしたりする才能を持っています。作品を売ると収入になるので、経済的にも両親の支えとなっています。

アクセサリー作りで両親を助けています

お店で働くお母さん(左端)の代わりにご飯や洗濯も頑張ります

アポセンター便り 2012年の活動

●貯水設備プロジェクト●

ティボロ小学校で使用する水の確保のために、自治体の職員、教師、保護者、生徒ボランティアが一致団結、喜んで作業をすることが出来ました。おかげで学校での手洗いや飲料、住民の食事、洗濯、はみがき、畑の水やりに使える水が確保でき、みんなとても喜んでいます。

●散髪とシラミ退治●

生徒の90%以上にシラミが発生。キム宣教師と知り合いの理髪師が、小学生200人全員の散髪とシャンプーを行いました。生徒の中には怖がる子どももいましたが、散髪のあとは嬉しそうでした。

●学用品と制服の配布●

幼稚園から高校１年までの244人に配布できました。子どもはもちろん喜んでいましたが、保護者もとても感謝していました。

●絵画コンテストに初参加●

「世界食料デー　芦屋大会」で毎年行っている子どもの絵画コンテストにティボロ小学校の子どもたちが初めて参加。「将来の夢」というテーマに全員が挑戦、それぞれが持つ才能や技術を伸ばすチャンスになりました。20名が入賞しました。先生、警察官、看護師、科学者など子どもたちの様々な夢がかないますように。

以上のほかに、運動会や遠足、栄養の勉強、歯磨き指導、学校にココナツの植樹、クリスマスカード製作と祝会などが行われましたが、いずれも世界里親会の支援があってこそ実現することができたもので、里親の皆様に心から感謝申し上げます。クリスマスには、里親様から届く手紙やカードに子ども達は大喜びをし、また特別な食事やプレゼントを受け取るというこの地域の子どもたちにとって夢のような一日となりました。

●アポセンターを含め４ヵ国でチャルド・サポーターを募集しています。里子一人につき毎月 4,000 円。ウエブサイトからお申し込みの場合は、クレジットカードもご利用になれます。資料請求は最終面から。大阪事務所　世界里親会 Tel.072(920)2225

～バングラデシュの幼稚園を訪問～

成長した里子の姿に感激

日本国際飢餓対策機構　特命大使　近藤高史

笑い声が絶えない茅葺き小屋の幼稚園

バングラデシュの首都、ダッカから西へ200㎞ほど行った「マチュパラ」という地域で、現地の国際飢餓対策機構が数日前から始めたという幼稚園を見学させてもらいました。日本の幼稚園児と同じような年頃の小さな子たちが20人程いたでしょうか、土間にジュート（黄麻）を敷き詰めて、壁と屋根は葺（ふ）いたばかりの萱（かや）で出来た簡素な建物でしたが、熱い日差しが照りつけてもこれならひんやり涼しく、教室には打ってつけです。「まだしつけができてない子どもたちも、小学校に入る前に先生の話を集中して聞くことや団体行動に慣れておくと、その後の成長がグンと違うんだ」とスタッフの一人が教えてくれました。子どもたちの様子を暖かく見守る大人たちの中に、きちんとした身なりのひときわ体格のいい青年が、腕を組んで立っているのが見えました。

今も残るカーストの束縛

彼の名はマニクランパリ。FHバングラデシュのスタッフとして近くの地域を任されているプロジェクト・マネージャーだそうです。話を聞くとなんと彼自身、かつて日本の里親から支援を受けて成長した里子の一人だというのです。そしてさらに驚いたのは、彼はバングラデシュに今も色濃く残る「カースト制度」という身分差別の中でも、最下層にあたるアウトカースト（不可触賤民）の出身者だということでした。

私は今回バングラデシュを訪ねた中で、車を降りてお茶を飲んだ通りの片隅や、河をフェリーで渡る船の中で、靴磨きをする何人ものアウトカーストの人たちを見かけました。家系にその名前を持って生まれたら、一生その束縛から離れられない人たちが、今なおバングラデシュには多くいるそうです。そうした社会を変えていくために、次世代の子どもたちがまず食べ物と安心して暮らせる生活が与えられ、そして教育を受けることが出来るように飢餓対策機構が支援をし、そこでマニクランパリさんのような生き証人がスタッフとして働いていることに、大きな感動を覚えました。

「自分が支援してきた里子が、今はどんな大人になっているだろう？」里親の誰もが知りたいことだと思います。私はバングラデシュでマニクランパリさんが、アウトカースト出身者ということを

子どもたちを見守るマニクランパリさん

みじんも感じさせない威厳あるたたずまいで、誇りと喜びを持って働いている姿を見て、神様は里親たちの祈りと捧げものを顧みていて下さり、確かに里子たちは世界を変える者へと成長していることを知りました。マチュパラで始まった小さな幼稚園が、またそうした祝福の「出発点」となりますように！

●チャイルド・サポーターのお申し込み・お問い合わせは、大阪事務所　世界里親会 Tel.072(920)2225（吉本、山田）

キリングループ労働組合協議会は、酒類や清涼飲料、医薬品や食品などを扱うグループ各社の労働組合が加盟（現在18組織）するいわば組合の組織として1971年に結成されました。同労協では組合員の地位向上にとどまらず社会貢献活動も取り組みの一つに掲げています。その一環として、当機構を通じ1992年から2007年までバングラデシュの子ども病院への粉ミルク支援、2008年からはカンボジアの現地協力団体ハガルへの豆乳支援を継続してくださっています。同労協事務局長の山本光彦氏に支援への取り組みについてお伺いしました。

キリングループ労協・立石勉議長㊨と同山本光彦事務局長

カンボジアの将来に希望を与えている豆乳支援

2011年のカンボジア・ハガル学習センター視察の様子、右は提供されている豆乳

Q　2011年に豆乳を支援しているカンボジアの現地NGOハガルの視察に行かれましたが、いかがでしたか？

山本　カンボジアへは事務局を含めた各労組からの参加者12名で行きました。現地を訪れて、豆乳支援は三つの点で効果的であることを確認することができました。一つはハガルのコミュニティ学習センターで豆乳の提供を受けた子どもたちの栄養改善が目に見えて進み、勉強意欲の向上になっているということです。もう一つは学校に豆乳を提供する工場で女性たちの雇用促進につながったことです。三つ目は、この支援は将来のカンボジアを支える人材の育成に貢献していることです。

Q　視察に参加された組合員さんからはどのような感想が聞かれましたか？

山本　私もその一人なのですが、よく聞いたのが、厳しい貧困の中でも、生き生きと明るくそして希望を持っている子どもたちの姿に驚いたという声でした。ある組合員は「あの子どもたちを見ていると自分たち日本人ははたして幸せなのだろうか」と考えさせられたとの感想を寄せていました。

Q　そのようなある意味嬉しいリアクションというのは、現地視察ならではのものですね。

山本　ええ、そうだと思いますし、自分たちが集めた募金（愛のカンパ活動）が現地の人々に様々な形で役立っていることを知って、豆乳支援を続けて本当に良かったと実感できました。キリンは飲料や食品を扱うメーカーなので、豆乳という食品がしっかりと活用されていることに、募金した組合員からも意義がある支援と受け止められて「これからも続けよう」との声になっています。

Q　愛のカンパ活動はどのように行われているのでしょうか。

山本　愛のカンパは、グループ労協に加盟する18労働組合と友好労組が６月と12月の年２回、組合員に呼びかけて行います。６月は国際社会貢献として、この豆乳支援のため、12月は国内の様々な地域社会を良くする働きのために、各労組との連係でそれぞれの支援を実施しています。集め方は、各労組毎に募金箱や募金袋の配布などで実施しています。

Q　グループ労協の役割について教えてください。

山本　労協とはキリングループに加盟する各労働組合の連絡協議会で「グループで働く仲間とその家族の人間性を尊重し、全員の幸せを実現する」という運動理念があります。そのために労組間の情報交換、人の交流を行います。それと共に、このグループの組織力を社会貢献にも役立てていきたいという使命も掲げています。年間200万円を越える豆乳支援も、グループで取り組めるスケールメリットだから実現できていると思います。

Q　ゴールデンウィークに再度カンボジアに行かれますね。

山本　前回の訪問がとても良かったので、組合員から一部負担でも行きたいとの声があり、再度訪問となりました。沢山の組合員が参加希望を出すので絞り込みが大変なんです(笑)。それだけこの支援に高い関心を寄せてくれていることは、労協としても嬉しいですね。参加者にはそれぞれ気づきを持ち帰ってきてもらい、皆さんにフィードバックしていただきたいと願っています。

●広報では支援者の皆様の取り組みをご紹介したいと願っています。ぜひ大阪事務所・広報までお知らせ下さい